

博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 13 号

平成 27 年 4 月

聖心女子大学

は し が き

本号は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条による公表を目的として、平成27（2015）年2月19日または平成27（2015）年3月14日、本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した甲は聖心女子大学学位規程第5条第1項（いわゆる課程博士）によるものであるものを示す。

氏 名	中山 博子 (なかやま ひろこ)	11 頁
学位の種類	博士 (心理学)	
学位記の番号	甲第 29 号	
学位授与年月日	平成 27 (2015) 年 3 月 14 日	
学位授与の条件	聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当	
審査研究科	聖心女子大学大学院文学研究科	
論文題目	乳児期における泣きの縦断的研究 ——コミュニケーションの観点から——	

氏 名	中山 博子 (なかやま ひろこ)
学位の種類	博士 (心理学)
学位記の番号	甲第 29 号
学位授与年月日	平成 27 (2015) 年 3 月 14 日
学位授与の条件	聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当
審査研究科	聖心女子大学大学院文学研究科
論文題目	乳児期における泣きの縦断的研究 ——コミュニケーションの観点から——
論文審査委員	(主査) 教授 川 上 清 文 (副査) 准教授 岸 本 健 (副査) 教授 遠 藤 利 彦 (東京大学大学院教育学研究科)

博士学位論文の要旨

1. 本論文の構成

本論文では、乳児期における泣きの発達を4つの研究から捉えている (Figure 1)。日常生活における乳児の泣きの表出と、それに対応する母親のかかわりを縦断的に観察したデータを用いて、行動および感情の両面から泣きの発達特徴を検討した研究1、研究2および研究3、乳児の泣き声に対する大人の感じ方を問う実験を試みた研究4である。

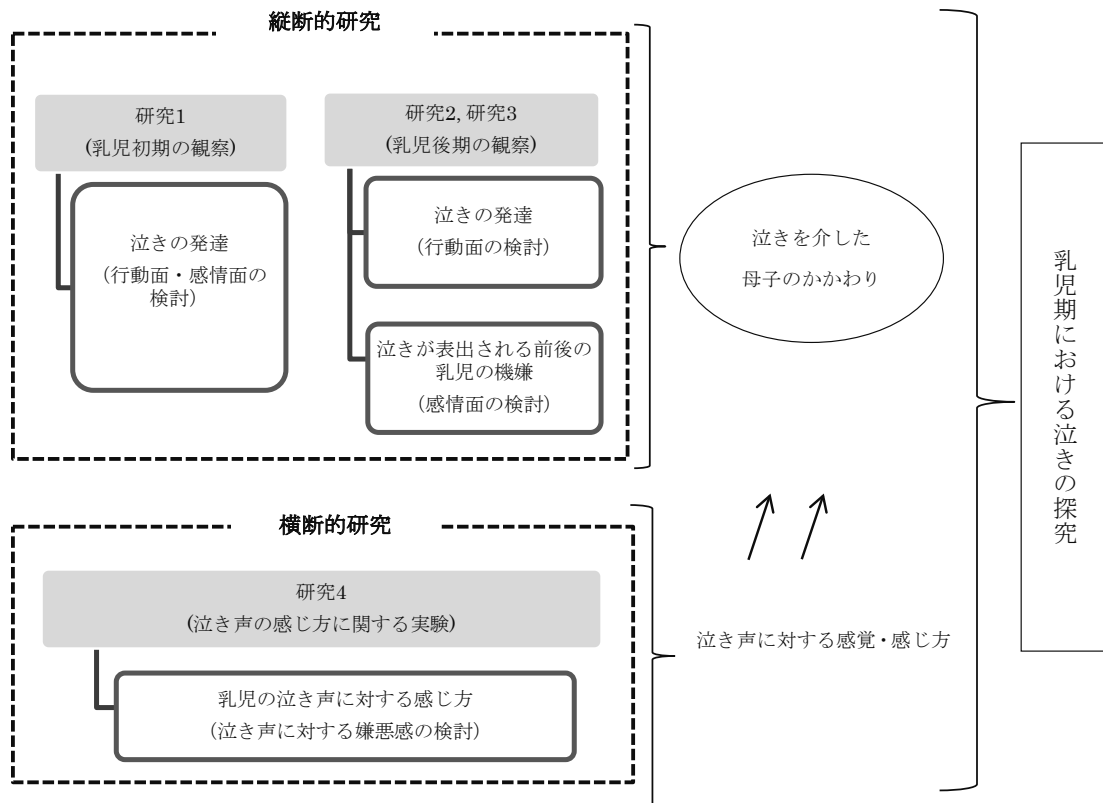


Figure 1 研究の構成

乳児の泣きに対する関心は高く (e.g., 陳, 1986)、これまでもさまざまな観点から検討されてきたが (e.g., Bell & Ainsworth, 1972; Brazelton, 1962; Lester & Boukydis, 1985; Wasz-Höckert, Lind, Vuorenkoski, Partanen, & Valanné, 1968; Wolff, 1969)、乳児の泣きに関する研究の問題として、研究対象が欧米中心であること (St James Roberts, 2012)、実験場面での泣きではなく、日常生活のなかで自然に観察される泣きに注目する必要があること (Barr, Hopkins, & Green, 2000)、乳児の泣きが有するコミュニケーションや情動的な意味を理解するための研究は揺籃期であること (Zeskind, 2013) などが指摘されている。また、乳児の泣きを生理的变化やネガティブな情動表出の形としてのみ扱うのではなく、乳児と外界をつなぐ大切なコミュニケーションとして捉え、乳児の泣きの特に肯定的な側面に焦点を当てて乳児の泣きを検討した実証的な研究は少なく、その点に着眼したこ

とが本論文の特徴の一つである。本論文は研究1から研究3までは縦断的な事例研究を主体として、研究の視点が実際の日常観察場面から浮かび上がる母子の泣きを巡る特徴の探究であるのに対し、研究4は実験によって乳児の泣き声と大人の感じ方の関係に注目するものである。本論文では、泣きという現象を複数の視点から検証することにより、乳児にとって泣くという行為は非常に重要な行動であること、その表出は単に不快な情動表出にとどまらないこと、すべての乳児の泣き声が聞き手に不快感を抱かせるとは限らず、むしろ、一部の泣きについては乳児に対して愛おしさや慈しみの感情をもたらす可能性があることなど、泣きが大切なコミュニケーション手段として機能していることを検証するものである。

2. 各研究の結果と考察

生後初期における乳児の泣きの発達 [研究1]

研究1では、生後初期における乳児の泣きの特徴やその発達過程を検討することを目的とした。生後0か月から1か月の乳児4名（女児1名、男児3名）を対象として、日常生活における泣きの表出とそれに対応する母親のかかわりを、1か月に2回の頻度で7か月間縦断的に観察した。その結果、生後3か月以降は対人的な理由による泣きの割合が増加するなど、乳児初期の泣きは生後3か月に大きな転換期を迎える可能性が示唆された。Kawakami (2005) は、乳児初期においては生後2か月に対人発達に急激な変化が突然生じるのではなく、生後3か月にも発達は続くことを主張しており、本研究の結果はKawakami (2005) の論考と一致した。また、対人的な泣きのなかでも、minimal (no)-distress な状態でありながら母親との情動的なコミュニケーションを求める甘え泣きが生後2か月から観察された。乳児の泣きに対する母親の介入については、乳児の苦痛・不快度レベルが強いほど母親の泣きに対する反応時間が必ずしも短くなるわけではなかった。すなわち、たとえ乳児が窮乏な状況ではないとわかっていても、母親はそうした泣きに介入し、乳児からのほたらきかけに積極的に応じていたことが判明した。

乳児後期における泣き行動の発達 [研究2]

研究2は、生後7か月以降の乳児2名を対象として、日常生活における泣き行動の表出とそれに対応する母親のかかわりを、1か月に2回の頻度で6か月間縦断的に観察し、その発達特徴を検討することを目的とした。その結果、乳児の泣き行動には頻度や持続時間などの個人差がある一方で、視線の使い方や泣きのパターンなどに関しては両児に共通する特徴がみられた。生後9か月を過ぎると、乳児は視線を養育者に向けるだけでなく、腕を伸ばしたり、実際に母親に近づこうとしたりする動きが伴うなど、よりコミュニケーション的な泣き行動を表出した。また、生後11か月から12か月にかけては嘔泣きが観察され、生後1年になるまでにあざむき行動をする可能性が示唆された。乳児後期においては、乳児の対人認知能力やコミュニケーションスキルが相当に発達していることが推察される。

泣きを表出する前後における乳児の機嫌 [研究3]

研究3は、泣きのエピソードが始まる前と泣きが終息した後の乳児の機嫌について検討

することを目的とした。その結果、乳児の月齢にかかわらず泣きが始まる前と泣き止んだ直後の乳児の機嫌はほぼ常に悪いことが判明した。しかしながら、例外的に乳児の機嫌がよいと思われる場面も観察された。それらは嘘泣きであると解釈される泣き行動であった。通常、泣き行動は乳児の不快感を反映したものであると考えられている。しかしながら、必ずしも常に乳児の機嫌が悪いとは断定できず、むしろ、決して機嫌が悪くなくても泣いたふりをして養育者の注意を引こうと試みる可能性が示された。また、泣きが終息した後における乳児の機嫌は、母親との身体的な接触によって回復することが示唆された。

乳児の泣き声に対する感じ方 [研究 4]

研究 4 では、乳児の泣き声を大人が聞いた場合どのように感じるかという点に注目し、泣き声を刺激とした聴取実験を行った。その結果、泣き声に対する嫌悪感、音圧など主に音の強さに関わる指標が影響していることが判明した。波形分析の結果から示唆されることは、回答者が泣き声に対して嫌悪感を抱いたり乳児が不快な状態であると推察するような音声は、振幅が大きく、周期も長い、他方、回答者が泣き声に対して好感を抱いたり乳児が不快な状態ではないと推測するような音声は、振幅が小さく、不連続的に短時間生じているという点であった。乳児後期の泣き声と比べて、乳児初期に観察される泣き声のほうが回答者に与える嫌悪感の度合いが低く、「あまえないから」など一部の泣き声に対しては好感を抱いていることも判明した。

本論文の研究結果は、乳児が泣きを介して母親と積極的にコミュニケーションをはかっており、乳児後期における嘘泣きの表出は乳児の対人認知能力が発達していることを反映していると推察される。生後 9 か月を過ぎると、泣くという行為は乳児にとって genuine な情動表出にとどまらず、他者の注意や行動をコントロールするため意図的に用いられている可能性が示唆される。生後初期の泣きは生後 3 か月に発達の転換期を迎え、甘え泣きが母子をつなぐ情動的なコミュニケーションとして重要な役割を果たしていることが推察される。泣き声の感じ方に関する実験では、乳児の泣き声が不快であるというこれまでの前提とは異なり、泣き声によっては聞いている人にポジティブな感情をもたらすことを示した。大人は乳児が表出するすべての泣き声に嫌悪感を抱くわけではなく、むしろ、一部の甘え泣きに対しては好感を抱く可能性が示された。我々ヒトには乳児の生存に有利にはたらくような、泣き声に対する感度が元々備わっている可能性が示唆される。

本論文の特徴は、乳児の泣きの特に肯定的な側面についての知見を示した点であり、乳児の発達や心理的な援助を考える上でも有意義な試みであるといえる。

Longitudinal studies of crying in infancy from the perspective of communication

Abstract

The purpose of this dissertation, composed of four investigations, was to examine the development of crying behavior in infants and examine infants' communication with their mothers through crying (Figure 1).

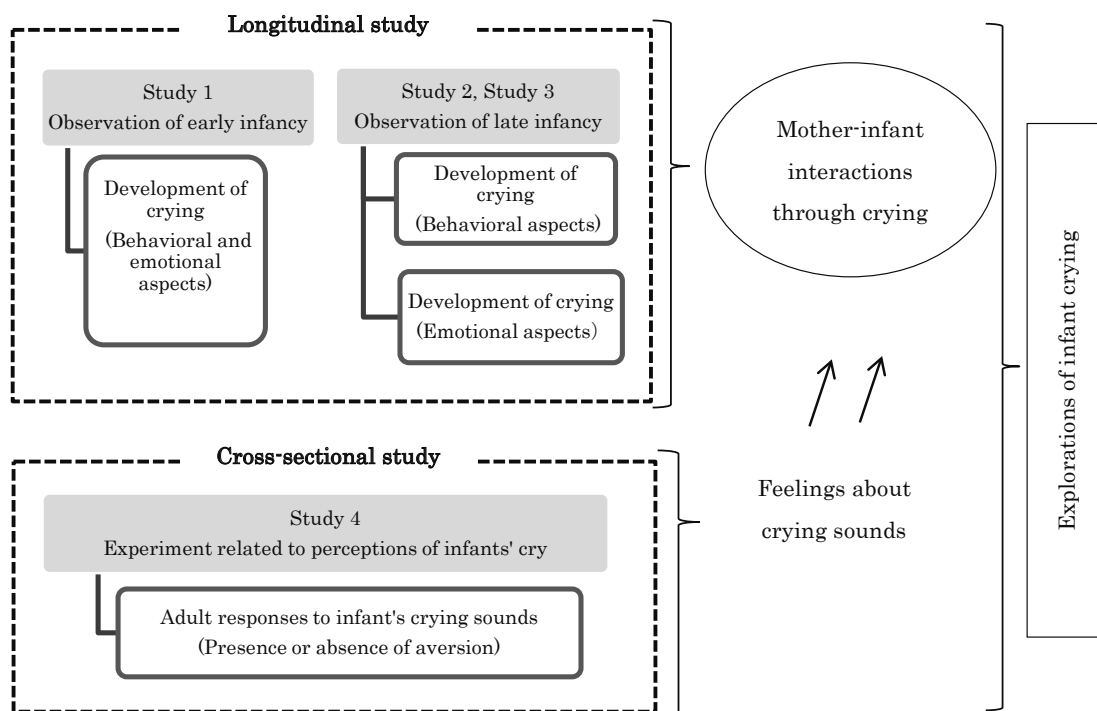


Figure 1 Composition of this dissertation

Study 1 examined the development of infants' crying and their mothers' responses to crying from birth to 6 months of age. Four infants were observed longitudinally twice a month for 7 months. Infants were more likely to cry as a result of biological reasons such as hunger or sleepiness between the ages of birth and 1 month old. After the age of 3 months old, by contrast, there appeared to be a dramatic increase in crying as a result of social and interpersonal reasons. Crying episodes that were accompanied by looking emerged at 1 month old and increased in proportion after the age of 3 months. After taking the development of crying in early infancy into consideration, the results showed that 3 months of age was a major turning point in crying behavior. Interestingly, crying for interpersonal and social causes, such as amae crying in

pursuit of emotional communication with significant others, emerged at the age of 2 months old. Mothers' interventions in response to their infants' crying indicated that mothers did not always intervene more promptly to more distressed crying. Rather, they also responded quickly to crying without distress. A point of interest is that mothers responded to their infants' cries relatively a little faster when their infant showed amae crying rather than when cried for a reason other than amae crying.

Study 2 examined the development of crying behavior in infants during the second half of the first year of life. Two infant girls between 7 and 14 months of age were observed twice a month for 6 months. While infant crying behavior varied between individuals such as frequency and duration, it also had common characteristics in both infants, such as vocal and facial expression, degree of proximity to mother, patterns of crying, and so on. These infants exhibited crying behavior that became more sophisticated with increasing age, which marked a proactive stance in communicating with the mother on the part of the infant. The results showed that the behavioral changes in crying during late infancy occurred after 9 months of age. Interestingly, at 11 and 12 months of age, "fake crying" was observed during a naturalistic interaction with the mother. This implied that infants are capable of fake crying by the end of the first year of life. It also suggests that deceptive infant behavior develops at a very young age.

Study 3 examined the affect of infants just before the onset of crying and just after crying terminated. The infants nearly always displayed negative affect just before starting to cry and soon after the crying ended. However, there were exceptions and positive affect was also observed, which were identified as "fake crying". These data indicate that although the affect of infants in general is negative just before and right after crying, they can also exhibit positive affect when they show fake crying. This implies that crying is not only an emotional expression, but can also be used deliberately by the infants as a preverbal communication.

Study 4 examined adult responses to infant's crying sounds in cross-sectional data. Female college students (N=26) participated in the experiment. They rated their own emotional feelings and assessed the infant's condition by using the different crying sounds emitted by the infants. The results indicated that crying sounds with a large amplitude caused more aversive feelings, whereas crying sound with a small amplitude caused more positive affect in the participants. Respondents were less likely to feel aversive when they listened to the infant's crying sounds caused by seeking attention and love. This study indicated a new and different finding, which suggest that infant's crying sounds have a positive effect on listeners' emotions, depending on the causes of crying. The study also suggested that adults do not necessarily experience a feeling of aversion towards all crying sounds, but that they have positive feelings toward a certain type of crying, such as amae crying.

It may be no exaggeration to say that crying is the very nature of infant behavior.

The above four studies suggest a more positive interpretation of infant crying and encourage us to recognize the importance of developing favorable environments for infants. It would also provide a hint for caregivers to manage infant crying and to get support as needed.

学位申請論文の審査結果の要旨

学位申請者 中山 博子
論文題目 乳児期における泣きの縦断的研究
——コミュニケーションの観点から——
審査委員 主査：川上 清文
副査：岸本 健
副査：遠藤 利彦（東京大学大学院）

1. 論文の要旨

本論文の目的は、これまでほとんど蓄積されていない乳児の“泣き”の縦断的データを得て、それを考察すること、また“泣き”をコミュニケーションという視点から分析することである。“縦断的”とは同じ対象を継続して追跡することを意味する。そのために4つの研究が行われ、それぞれがひとつの章を構成している。

本論文は3部構成であり、第1部が「問題と目的」、第2部は「研究」、そして第3部が「討論」である。

第1部は、さらに第1章問題と、第2章研究の構成と目的に分かれる。第1章では、これまで海外や我が国でなされてきた研究をまとめている。第2章は研究史を踏まえて、本論文の研究構成や目的を論じている。

第2部は、生後初期における乳児の泣きの発達を調べた研究1（第3章）、乳児後期における泣き行動の発達を追跡した研究2（第4章）、研究2の泣きデータに基づき、泣きが表出する前後における乳児の機嫌を分析した研究3（第5章）、そして研究1と2の泣きデータを用いて、大人が乳児の泣き声をどう感じるか実験した研究4（第6章）から成る。

第3部では総括的討論がまとめられている（第7章）。

4つの研究結果は、次のように要約できる。研究1では生後2か月から“甘え泣き”がみられ生後3か月から増加した。研究2では生後11か月から“嘘泣き”が観察された。研究3の分析により、泣きの前後はたいがい機嫌が悪いが、“嘘泣き”に限ると機嫌がよいことが明らかになった。研究4からは、大人が乳児の泣き声を判断する時、最も重要な要因は音圧であることがわかった。

本論文の研究により、乳児の“泣き”の発達過程が示されたことになる。それは従来考察されてこなかった、コミュニケーションという視点からの“泣き”の発達的变化でもある。

2. 本論文の評価

まず特筆すべきは、研究2と3が海外の一流雑誌にすでに掲載済みということである（研究2は *Infant Behavior & Development*, 2010, **33**, 463-471。研究3は同誌、2013, **36**, 507-512）。すなわち研究の外部評価を得ている。研究1も投稿済みであり、近い将来、海外雑誌に掲載されるであろう。

これまでも何人かの研究者が“嘘泣き”に言及してきた。しかし、それをデータの形で示したのは、本論文の研究2が初めてであるといえよう。さらに乳児初期のデータも加

えることによって、乳児期の“泣き”の発達の全貌を描き出したのである。発達心理学への大きな寄与と考えられる。

さらに研究3では、“泣き”に感情面からの詳細な分析を加え、研究4では実験心理学的な探究も試みた。ともに斬新な切り口である。

本論文が示したデータは、今後の乳児研究の新たな出発点となりうる。“嘘泣き”は本当に嘘といえるのか、泣き声と言語発達はどのように関連しているのか、などを検討する道を切り開いた。さらに本論文が考察した様々な論点は、子育てや保育の現場に還元されうる示唆を豊かに含んでいる。

3. 本論文の審査の過程

本論文は平成26年10月27日に提出された。同年10月30日に学長より審査の付託がなされ、規定に従った3名からなる審査委員会が発足し、審査が開始された。同年11月25日の第1回審査会では、多くの時間をかけた貴重なデータに基づく研究の集大成であり、博士論文として認めうる内容であることがまず確認された。ただし、研究の呈示順の変更、研究史における観点の追加、一部統計上の修正、などの提言があった。これらの提言に基づいた修正稿により、同年12月19日に第2回目の審査会が開催された。総括的討論で深めるべき内容などが再び示され、平成27年1月27日の博士学位申請論文公開審査会でさらに討論することになった。公開審査会及び最終試験では、発達における個別性と普遍性などの質疑がなされた。応答は的確で、相応の学力を備えていることが確認された。

最終的に、審査委員会は、上記「2. 本論文の評価」に示した点を踏まえ、本論文が文学研究科人間科学専攻の博士(心理学)の学位に十分値するものであると判断し、合格とした。

博士学位論文
内容の要旨および審査結果の要旨
第13号

平成27(2015)年4月25日発行

発行 聖心女子大学大学院
編集 聖心女子大学大学院
〒150-8938
東京都渋谷区広尾4-3-1
電話 03-3407-5811 (代表)